

「アジア地理言語学研究」平成27年度第2回研究会

日時：平成27年12月19日（土）13:00-18:00, 12月20日（日）10:00-12:00

場所：AA 研マルチメディア会議室(304)

発表・討論はほぼすべて英語で行われた。

今回の研究会の第1部は前回のテーマである「太陽」の概観と残りの発表からなる。Chitsuko FUKUSHIMA(ILCAA Joint Researcher, University of Niigata Prefecture), *Sun in Asia* は前回の各分担者によってなされたアジア全域の「太陽」の地理分布と解釈に共通して見られる傾向を概括したもの。各語族においてより古いと看做される語形は1音節からなること、それが *day* など他の意味を派生して多義語となり、それと区別するため多音節語になること、などの一般傾向を指摘した。また、「太陽」を「昼間の目」や「天の目」のように表現することがオーストロネシア・オーストロアジア・タイカダイ・中国語など主として東南アジアに語族を超えて現れること、また東アジアでは信仰の対象となっていることを窺わせる語形となっていること、などアジア全体を見渡したパノラマを手際よく与えた。『アジア言語地図集』第1巻の完成時には各項目の冒頭にそれぞれこのような概観をつける予定としており、そのよいお手本を示していただいた。

太陽に関しては全世界で同一の物体しか該当しないようではあるが、日光の照射量とそれによる気温の違いに大差があり、ヒトの太陽に対する態度も育み主であるか避けるべき対象かといった差が現れうるであろう。また熱帯では太陽が昔7つあって焼け死にそうだったので英雄が6つ弓で射てようやく1つになったという神話があったりし、そうしたフオークロアの種類の地理分布との比較も将来の課題となろう。

Atsuko UTSUMI (Meisei University), *Sun: Austronesian* は「昼間」と同形となるAタイプ、「昼間の目」となるBタイプ、「目」と同形となるCタイプ、「日差し」と同形となるDタイプ、その他のEタイプを見出し、特にCタイプの形成過程に関心が集まった。地理的にBタイプと近接していればそこからの縮約によって生じたとし得るし、そもそも「太陽」を「昼間の目」と表現する発想法の根源は何なのか、民間語源の手がかりが得られないか、という討論があった。

【遠藤補：この問題について、陈孝玲《侗台语核心词研究》成都：巴蜀书社，2011，pp.168-171が引く刘宝俊《比较词源学研究四例》《民族语文》2004/2，特に42頁は重要なヒントを与えてくれる。まず，Edward Tylor, *Primitive Culture*, 1873, London : J. Murray, p.276ff. (日本語訳：タイラー，比屋根安定訳『原始文化』東京：誠信書房，1962) は太陽が神の目だとするインドなどの神話があるとす。また英語の *daisy* の語源が *day's eye* であることにも言及する。つまり，この花が昼の間開き，夜には閉じる点で目と類似する，ということである。タイラー以降一世紀以上を経てもっと多くの神話や伝説が集成されているはずであり，博雅の指教に待つところが多い。】

第2部は「稲」がテーマで，まず Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology), *General Remarks on Rice for the Asian Geolinguistics* が稲の品種，栽培の歴史，

アジア東部の大陸部・南アジア・朝鮮半島および日本列島・東南アジアへの伝播年代に関する概観をし、語彙を集める際に「稲・モミ・コメ・玄米・精白米・炊いた米・ごはん」などを区別すべきところ、既存の資料が英語などで書いてあると rice とだけあって、具体的に何を指しているか不明瞭なことが多いため、厳密には直接自ら調査すべきである、と警鐘を鳴らした。フロアからは、中国語が媒介言語である方言資料だとそれらを区別して表示してあることも多く、理想を追求することは素晴らしいことだが、目下の条件下では多くの場合においては現有資料でできることをやろうというのが現実的だとせざるを得ない、という意見が出された。

Ryo MATSUMOTO (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University of Foreign Studies), Rice: Uralic and Tungusic はシベリアではそもそも稲が栽培されておらず、また主食という概念もない、とのことでロシア語の рис からの借用語か該当語彙なし、という地点が大半であることが示された。しかしながら、これも稲作地域でないということを示す積極的な証拠となるもので有益なものであった。中国東北部のツングース語では「稲」と「米」を表す語彙が存在し、前者は kandu ないし xandu のような語形で、中国語の“早稻 hǎndào”からの借用語か、と問いかけがあった。確かにそれは「陸稻」を表す語だが、“水稻”と対になり学術用語としての色彩を帯びていて、一般人にとってはかろうじて理解できる程度の語彙であるという問題点が指摘された。“粳”と関係づける可能性も提案された。満州文語に「米」を表す語彙に bele があり、シベ語・ホジェ語にも継承されており、中国から稲・米が伝播した時代について手がかりを提供した。

Masaaki SHIMIZU (ILCAA Joint Researcher, Osaka University), Rice: Austroasiatic は Ferlus らの先行研究を参照しつつ 8 つの主な語形とその他のタイプに分類した。そのうち A の ba:ʔ タイプが最も周辺部に分布するため極めて古い語形であり、E の sa:ʔ タイプは D の C-rə タイプより外側に分布するためより古い...といった一連の新旧の序列を推定した。また H の alɔ:3 タイプは中国語からの借用語だとされている。オーストロアジアではおおむねイネ・モミ・コメに対する語形は区別されているが、コメの語形は \*r.koʔ と \*phe の 2 タイプのみで、その分布も地図化したことは意義深い。

Shinsuke KISHIE (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokushima), Dialectal Word-forms Associated with the Word *Ine* (rice) in Japanese は本土方言ではイネの音声変異型が分布し、南西諸島でマイ（「米」の漢字音）の音声変異型が分布することを示した。南西諸島に関しては『図説琉球語辞典』のより詳細な地理分布を引いて地点密度が荒い資料では現れてこなかったイネに相当する語形も存在することを示した。またコメについての地図も同様にして描画し、本土方言と南西諸島のうち琉球まではコメの音声変異型だが、宮古島～与那国島ではマイの音声変異型となっていることを示した。質疑応答では、この地域ではイネとコメを同じマイ系の語形で指すこととなり区別しないのは元はイネを植えておらず、他所から産品としてコメを移入する時代があって、日本語固有の和語ではなくコメを指す漢語が入ったというような可能性はないかが問題となった。この点についてはここにイネがも

たらされた経路や生産の歴史について調査する必要があり、稲作の専門家の意見が知りたいところである。

Yoshio SAITO (Tokyo Gakugei University), “Rice plant” in Mongolic and Turkic はまずモンゴル諸語では A の *tuturgan* タイプと B の *kans* タイプの 2 つがあり、前者はチュルク諸語から古く借用されたが、チュルク諸語ではかえって廃れたものとした。後者のタイプは北東部に分布し、また清代にそのあたりから新疆に移植した屯田兵の後裔の言語にも見られる。イネはモンゴルでは栽培されていないが、イネとコメの語形は区別されており、中国語からの影響と見られる。チュルク諸語では 5 つのタイプがあり、A は *döge* 型で「脱穀された穀物」に由来し、カスピ海周辺に分布する。B は *küriš* 型で新ペルシャ語の *guriñj* に由来し、ウズベキスタンからキルギスにかけて分布する。C は *pirinč* 型でペルシャ語の *birinj* に由来し、トルコなどの西部に分布する。D はウイグル語の *šal* で、ペルシャ語の *šālī* に由来する。E は *ris* 型でロシア語に由来し、ロシア領内の諸語で使われる。多くのチュルク諸語ではイネとコメ・モミの語形は区別されない。言語学的な根拠からすると、チュルク諸語のイネ・コメの語形は米を常食するペルシャから前近代に借用されたと見られる。ペルシャ語ではイネ関連の語彙を細かく区別して表現するが、それが様々な意味的変容を経てチュルク語に入ったのであろう。

Rei FUKUI (The University of Tokyo), *Rice and related words in Korean* はまずイネ関連の語彙を系統的に例示し、日本語との意味領域の異同も対照しつつ、各々の語の指す意味を精密に把握した。更にイネとコメについて地図化を行い、前者は *pjo* 型が北部・中部、*na-rak* 型が南部に分布し、後者は *ip-sal* が北部、*s'ar* 型が済州島に分布し、中央部・南部は具体的な方言資料が欠けているものの *waŋ* 型と見られる。小倉進平の著名な先駆的論文「稲と菩薩」も引きつつ歴史的解釈を与えた。「*pəsal* 菩薩」型については、オーストロネシア語の *bəras* から *metathesis* によって生じた可能性を伊藤英人氏が既に指摘していることが紹介された。

Kenji YAGI (ILCAA Joint Researcher, Kyoto University), *Rice in Sinitic* については先行研究として秋谷裕幸「イネ(稲子)」岩田礼編『漢語方言地図集』、平田昌司代表科研費報告書『中国の方言と地域文化』2, 1995 の東南部方言を中心とした地図と曹志耘主編「稲子」『漢語方言地図集』詞彙卷 11, 北京: 商務印書館, 2008 があり、分布図自体は大局的には同一である。しかし、更にモミ・コメと粟との間で語形が方言間で交錯する現象を体系的に扱っている。そのほか、漢代の『説文解字』(AD100 年成書)におけるイネ関連の語彙を集め、有用である。

Hiroyuki SUZUKI (ILCAA Joint Researcher, National Museum of Ethnology), *Rice plant: Tibeto-Burman* はいつもながら他語族より地点密度が格段に高く、しかもチベット語諸方言については鈴木氏の自ら調査した資料を主としており、信頼性・均質性の高さにおいても刮目すべきものである。もちろん、チベット・ビルマ語の分担者諸賢の貢献によるところも大きい。一枚目の「太陽」に比して空白地域をよりきめ細かに埋める努力が着実になさ

れていて壮観である。またチベットビルマ祖語に関する比較言語学的研究の成果もきちんと踏まえており、約 10 年後となるであろう第 3 次プロジェクトで目指すレベルほどの完成度となっている。詳細については *Studies in Asian Geolinguistics*, Vol. 2 に公刊される 4 頁分の規定原稿と 15 頁分の同氏の自由論文を見られたい。後者においては既に構造的な扱いが徹底して行われており、その意味でも驚嘆に値する。研究会ではやはり有名なチベット語 \*b-ras とオーストロネシアの bəras との関係が問題となったが、これは大きな問題であり、引き続き多方面にわたる考察が必要である。また E. の語形 kuk は分布地域からしても雲南漢語の「穀」と関係があるのではないかという質問があったが、その点は STEDT で既に指摘されていることが後で分かった。その場合、雲南漢語では既に入声韻尾は失われて開音節となっているか -ʔ となっているが、白語などに借用されたときにはまだ -k 韻尾を保っていたこととなる。白語はチベットビルマ語の中でも漢語語彙を受け入れた程度が著しく、その主層は漢語上古末期の去声の一部 -t を保存していた六朝時代の様相を呈している。雲南に漢語官話方言が入った時期はそれほど古くないと思われるが、文献資料としては明初の『韻略易通』(1442 年)がある。そこでは額面通りに受け取ると -p, -t, -k の別が保存されていたこととなるが、もしかしたら現実音の状況を反映するかもしれない。一方、イネを表す漢語の語形として「穀」類が雲南に分布する歴史も案外古いものであるかもしれない。こうしたことは漢語だけ、またはチベットビルマ語だけの言語地図を見ても着想し難い事柄であり、アジア全域のすべての語族に関して統一規格で言語地図を描こうとする今次プロジェクトの意義の 1 つである。

Mitsuaki ENDO (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University), Rice: Tai-Kadai はタイ・カダイ語の語形としては主として A. の  $\gamma$ au C2 型と B. の khau C1 型の 2 つがあり、A. は北部や最南端および保守的な特徴を示すことの多い Saek 語に見られるのに対して、B. は南部に見られることから、A. の有声頭子音で始まる語形のほうがより古いものとした。そして、先行する諸学者の説を検討しつつ、 $*\gamma > fi > h > x > k^h$  という順で頭子音の変化が進行したものと推定した。Ferlus (2010: 65) はタイ諸語の語形  $k^h$ aw C1 はモン・クメールの  $*r.koʔ$  に由来するとしており、清水政明氏は今回の研究会の報告で上で記したようにモン・クメールのコメを表す語彙は東南角を除き  $*r.koʔ$  型が分布することを描画している。現代タイ諸語の有気音の形成過程が問題となったが、コメの頭子音はラームカムヘーン大王碑文以来の古いタイ語の正書法では  $\gamma$  と記される類に属しており、それが近年になって  $\gamma k^h$  に合流したこととなり、 $x > k^h$  という fortition による有気音の形成過程が推定されている。また、海南島のリー語では C. として m 型があり、具体的には C-1  $mu:n$  C1 型・C-2  $mut$  型・C-3  $mew$  型などがある。これについてはタイカダイ語の内部だけで見ると孤立した語形となるが、清水政明氏が特に C-3 はモン・クメールの  $mau$  型と連なる可能性を指摘された。 $mau$  型が分布するベトナム南部にはチャム語(ただしこれ自体はオーストロネシア)などもあり、それが海南島に移住して回輝語となったという実例もあることから、地理的なつながりを想定する余地は充分ある。その他の語形はまちまちのものが 1・2 地点くらいにちらばって分布する

ため D.として一括し、地図上には表示しなかったが、他の語族における語形から見るとつながりが見いだされる可能性もあることを清水氏のこの示唆からして想定してもよい。こうした指摘がただちに得られるのも、アジア地域の諸言語をまんべんなくカバーする本プロジェクトの威力が発揮されたものである。

Yoichi NAGATO (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies)はアラビア諸語で最も優勢な語形は A.の ruzz 型であり、それが古典ギリシャ語の ῥυζα を借用したものと推定した。zz となるのは、アラビア語では通常語根は 3 子音からなるためである。B.の ʕe:f 型はペルシャ湾に分布し、もともと「命・生活」という意味であり、エジプトではパンの意である。アラビア半島では食事のメインとして肉や魚が載せられたピラフが一般的であったため米を指すようになったか。そのほか、C.の timman 型と D.の ma:ru 型がある。討論においては、Michel Ferlus, *The Austroasiatic Vocabulary for Rice: Its Origin and Expansion, Journal of the Southeast Asian Linguistics Society* 3:2: 61-76, 2010 がサンスクリット・ギリシャ語など印欧諸語におけるイネ・コメの語形がすべてオーストロネシア祖語の \*b.Ras に由来すると推定しており、アラビア語も含められているが、そうすると、東南アジア大陸部を除くと大半のヨーロッパ・アジア・北アフリカ諸言語のイネ・コメの語形はオーストロネシア語に由来することになるのか、という感想が述べられた。

今回はオーストロネシア語とインドにおける発表がなかったのが残念であったが、引き続きアジア全域をカバーできるように繰り返し反芻すべき重要テーマであることが再確認された。重要な先行研究である Nicole Revel, *Le Riz en Asie du Sud-est*, Éditions de l'École des Hautes Études en Science Sociale, 1988 を消化していくことも含め、今次プロジェクトの最後に予定している隣接分野の専門家を招いて行うシンポジウムに向けて更に地道な努力を積み重ねていく必要が感じられた。その一方で、当初の課題設定よりも遥かに本格的な解決を既に与えている担当者も多く、印象的であった。

(遠藤 光暁)